終戦

―復員当時の思い出―

村松盛雄
南台三丁目

私は終戦をフィリピン、ルソン島北部山中の山下複郭陣地で迎えましたが、当時は八月十五日が終戦日だということを知りませんでした。

当日は、毎朝日課のように飛来する米軍の小型観測機が現れず、毎日聞き慣れた砲声、銃声も途絶え、高空を輸送機が行き交い、「日本は無条件降伏、アイ　サレンダー（I　SURRENDER）」等、大きな見出しのついた米軍ビラが上空からバラ撒かれたり、何かいつもと様子がちがうなぁ…という感じがしていました。このように戦場が静かになった数日後、やっと上級司令部から停戦になったという達しがあり、私たちは陣地を離れ、山を降りることになりました。そして、太陽のまぶしい日中、何の警戒もせずに、山道をたどり、武装解除のための集結地に向かったのでした。このとき初めて戦争は終わったようだ、平和になったということを実感しました。というのは、私たちはフィリピン決戦のため、動員下令となり、遠い朝鮮北部の羅南から師団（約三分の一欠）ぐるみでルソン島のリンガエン湾に昭和十九年十二月上陸し、上陸後は戦況悪化のため企図の秘匿上、常に対敵行動や対空警戒のない夜間に主として行動していましたので、この半年間は、陽の当たる明るい道を隊伍を組んで堂々と行進するようなことはありませんでした。したがって、このようなことを実感したわけです。

武装解除後は丸腰のまま五列縦隊となり、敗残兵さながらの姿で、足取りも重く、約八十キロの山道を五日間にわたって連日歩かされ、更に大型トラック、鉄道無蓋貨車に乗せられ、時には沿道住民の罵声を浴びながら、マニラ東南のカランバン収容所に入れられたのでした。この徒歩行進は真偽のほどは分かりませんが、かつて日本軍が緒戦の頃やったバターンの死の行進（DEATH　MARCH）に対する報復だという人がいます。

数か月間の収容所生活を終え、私は帰還することになりました。復員船の二回目位で早いほうでした（復員は、戦犯容疑のない者から先に行われたようです）。復員船は、私の記憶では艦

砲や機銃を撤去した数少ない生き残りの駆逐艦であったかと思います。乗り組みの元海軍の水兵さんたちが、艦内で甲斐甲斐しく立ち働いておりました。乗船に際してＤＤＴの薬粉を一人一人頭から撒布され、持物検査を受け、乗船致しました。船の船首に大きく、鮮かに描かれた日の丸の標識を見たとき「ああ平和になった。祖国日本は健在だ」という安堵感と、一生忘れることのないルソンの激戦地を離れるという何ともいえない気持ちで、感慨無量のものがありました。

やがて船は赤い夕日の沈むマニラ湾を後にして、遠ざかるルソン島の山々に別れを告げ、往航、輸送船団で体験したような対潜、対空警戒等の緊張感もなく、一路平安な航海を続け、台湾沖、沖縄列島沖を経て、トカラ列島の小さな島々を左舷に見ながら、鹿児島・錦江湾に入りました。前方に雄大な桜島とその噴煙を眺め、船は加治木港に近づいて来ましたが、久し振りに見る内地の風物を、全員が甲板に鈴なりになって、食い入るようにみつめているうちに船は静かに接岸し、一同は上陸し、「やれやれ無事着いた。ここは日本だ」という喜びで一杯であったことを思い出します。

下船後、整列待機中あたりを眺めていると、飢えた戦地の習慣で視線が近在のイモ畑にゆき、サツマ芋の葉が風にそよぐさまを見て「内地の食糧事情は大丈夫だな。いざとなればこれを食べればよい」などと勝手な想像をしたりしておりました。と申しますのは、私たち兵団がルソン島に上陸してからは、補給はほとんどなく、戦況もジリ貧の状態で最悪に近く、終戦の頃は兵器、弾薬、糧秣に事欠き、栄養失調、マラリヤ、赤痢等病魔に倒れる者多く惨膽たる状況で、口に入るものは何でも食べておりました。痩せた小イモは御馳走の部類で、茎や葉に至るまで食べられそうなものは、野草や木の芽（例、南方春菊）に至るまで口にしておりましたから、習性というか、イモ畑にすぐ目がいったのでした。また、塩がないと人間の行動は不如意になるものです。これらは豊かな現在の生活からは到底考えられないことです。

このように当時としては困窮欠乏に堪え、最低生活を体験した者にとって、終戦―平和到来ほど有り難いと感じたことはなかったと思っております。

最後に、旧軍のあり方について、ひとこと触れてみたいと思います。当時私はまだ年も若く諸典範に示された通り、上官の命を金科玉条として命令一下死生を超越して「御国のために」という錦の御旗の下、あらゆる悪条件を克服して健闘致しましたが、ルソン島戦では、①米軍の物量の大きさには驚き入るばかりで総合戦力では一対一〇以上の大差があったのではないかと思います。すなわち空軍力を初めとして砲兵火力、戦車の性能、工兵、機械作業力、輸送能力等いずれをとっても格段の差がありました。②旧軍の兵器は旧式なものが多く、戦闘力に相

当の開きがあったのではないでしょうか？　例えば旧軍の三八式歩兵銃と米軍の連発式カービン銃では火力が大分違います。③補給がゼロで生きてゆくのがヤットでした。戦後米軍から携帯口糧「Kレーション」を支給されたとき「こんなうまいものを食べていたのか」と驚いた次第でした。④神州不滅、必勝の信念等精神力の強調だけではカラ念仏に等しく、実体を伴わない軍隊流の員数主義ではどうにもならなかったのではないかと思います。

追記

戦後、フイリピン戦の記録をみますと、参加総兵力陸海軍併せて約五九万人で、そのうち戦没者は約四七万人、生還者約十二万人（二〇パーセント）ということでした。（筆者は元第十九師団所属）